

第 1758 回（7 月 14 日）

人口と開発と生態環境

——江戸から明治へ——

（一橋大学） 斉 藤 修

徳川時代は、生態的にみて定常状態にあった社会と考えられているが、普通そうした均衡は、複雑な社会の中では見られない。なぜそのようなイメージが一般的となったのだろうか。実はこのような徳川時代像はその時代の後半部分に依存しているが、それ以前はデータの不足もあってあまりよく分かっていない。本報告は、17, 8 世紀のその間の事情を環境史的に探って、その時代の歴史的位相、前述のイメージの虚実を明らかにする試みである。

徳川時代の最初の 1 世紀、17 世紀は新田開発と人口成長の時代であった。1600 年頃には 200 万町歩だったのが 18 世紀の前半までには 300 万町歩ほどになったと見積もられている。また人口も同時期 1600 万人から 3000 万人強と、相乗的な増加があったと考えられる。これに対応して森林の乱伐、山の荒廃が起こったようで、同時代の文章にそうした記述を見つけだすことができる。熊沢蕃山は「静なる時運にあたりて、文武の教なければ、国郡の主も人に君たるの道をしらず、榮花のおごりを事とせり。…無道至極して、天下の山林を伐りあらしたれば…」と書き、他にも同様の多くの記述がある。これは大火のためといった一時的な事件が理由となっているのではなく、有名な紀伊國屋文左衛門などの材木商たちが良木を求めて急速に深山に分け入ったという。林業史でも「木材枯渇の時代」と呼ばれ、樹種の減少も見られた。そしてこれにともなって下流域の水害も数多く発生し、17 世紀後半が「水論、山論の多かった時代」と言われる所以である。そして現在でもそうであるように、「野獣との戦い」という現象も指摘されている。こうした問題を

発生させた原因は都市化によるものであって、建設のブームである。その意味では市場の原理による力が、森林、エコロジーの荒廃、破壊を導いたということになる。

このようないわばエコロジカルな危機に対してどういう対応が見られたのか。幕府では 1666 年の「諸国山川掟」が代表的であるが、領主直轄林で行われた「留山」「留木」も実質的な効果は大きかった。また禁止的な措置の他に育林が取り入れられたことも注目される。同じ熊沢蕃山も植林を考えている。また農書がこの時期多く書かれたことも重要な点である。そこには、宮崎安貞「其のうへ、売買の道も広くなりて、民富、国豊かになるはかりこと、田畠に続きてハ山林を専らにすべしと見えたり」という言葉にあるように、すでに市場が林業までも含めて考えられる時代が来ていたのである。いずれにしても、そうした発想の中には、継続的に供給可能な森林や農業が作り出される必要性の認識があった。それはいわば生態均衡維持タイプの経済を目指すものと捉えることもできる。

自然と人間とのこうしたやりとりは、製鉄や薪炭製造など、明治期の近代産業の誕生にも見られる。最近の研究では明治の産業成長において養蚕、製糸、製茶などの重要産業で化石燃料ではなく薪炭等の在来燃料が多く用いられていたことが指摘されている。自然の供給力を維持しながら市場に対応していった部門もないことはなかったのである。このことは単に進んでいる、遅れていると言う問題ではなく、考えてみる必要がある。

（文責・合田素行）